The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	テ形接続構文における逆接の意味について
Author(s)	松浦, 幸祐
Citation	日本語・日本文化研究. 2019, 29, p. 280-289
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/73713
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

テ形接続構文における逆接の意味について*

松浦　幸祐

1. はじめに

本稿の目的は、認知文法の観点から、テ形によって複数の節を接続する構文[1] (以下、テ形接続構文と呼ぶ) から解釈できる逆接の意味について考察することにある。

先行研究には、(1) のような文から読み取れる逆接の意味を「テ形が表す意味の一つ」であるとするものがある。これに対して、本稿では、(1) のような例から解釈できる「逆接」の意味は、テ形やテという形式に還元的に担わせられるものではなく、言語に表された事態関係と言語主体の持つ百科事典的知識との不調和によるものであると主張する。

(1) a. 彼は知っていて、教えてくれない。[2] (仁田 2014: 420)

b. こんなにおいしいお菓子を作って売らないとはもったいない。

(日本語記述文法研究会 2008: 286)

2. 先行研究とその問題点

先行研究では、テ形接続構文によって表される多義を網羅的に記述するという手法が多く採られ、その多義の一つとして逆接を表すテ形の存在が示される[3]。

本節では、そのような先行研究の代表として仁田 (1995, 2014) と日本語記述文法研究会 (2008) を取り上げる。さらに、テ形接続構文における逆接に関する比較的新しい先行研究である江口 (2016) を取り上げる。その上で、先行研究の問題点を指摘する。

2. 1. 先行研究

2.1.1. 仁田 (1995, 2014)

仁田 (1995) は、「シテ形接続の表す意味のあり方」 (p. 88) として「付帯状態」「継起」「並列」の３類を設定し、「継起」用法に「時間的継起」と「起因的継起」とを区別する。さらに、「起因的継起」の周辺的な用法として、 (2) の例を挙げる。仁田によれば、 (2a) は「主たる事象実現の条件として、通例ならば、作用するはずの副次的事象が、有効的に働いていない」ものであり、《逆条件》と呼ばれる (p. 120) 。仁田における逆接とは、《逆条件》と連続的であるとされており、(2b) の例とともに (3) の説明が与えられている。

(2) a. 行ってすぐに手術の用意ができないと困ると思って〜

b. あなたがたはここでも木を見て森を見ない、大きな錯覚を起こしている。

(3) 「事象間の関係が順当で自然ではないものの、副次的事象が、必ずしも主たる事象成立の条件をなしてはいない」もの (仁田 1995: 120)

また、仁田 (2014) では、「テ形が述語になって作られる従属節」の用法の一つとして、《逆接的なつながりを表す》テ形が挙げられている (= (4)) 。

(4) a. 彼は知っていて、教えてくれない。
b. 顔は優しくて、心は鬼だ。 (仁田 2014: 420)

2.1.2. 日本語記述文法研究会 (2008)

日本語記述文法研究会 (2008) では、逆接用法のテ形について、(5 = (1b)) の例を挙げ、(6) の説明を与えている。

(5) こんなにおいしいお菓子を作って売らないとはもったいない。(= 1b)
(6) 「従属節から引き起こされると予測される事態が起こらず、逆の事態が成立している場合には、逆接の意味を表すことがある」 (日本語記述文法研究会 2008: 285)

2.1.3. 江口 (2016)

江口は、「て」が逆接を表すという立場から、先行研究による逆接の規定をまとめた上で、逆接の解釈が可能であるテ形接続構文を３つの型に分類している。

まず、江口による先行研究のまとめ[4]を見ておこう。江口は、テ形接続構文における逆接の規定に関して「多くの研究者によって同様の指摘がされ」ている事実の一つとして、「前提的に予測される事態と逆の結果が生起」(江口 2016: 63) することを挙げている。

また、江口は逆接の解釈が可能であるテ形接続構文を以下の３つの型に分類している。

	シテ節述語の特徴	主節述語の特徴	備考
《偽装》型	「知る」「見る」「聞く」	〜ない [ふり/顔] をする	シテ節と主節とで、一つの慣用句的表現として成立
《敢行》型	「知る」「わかる」	動きの関与者にとって、不都合となる動作動詞	シテ節が〜テイテ
《意外性》型	特に制限はない	打ち消しや反語・反論などの表現が共起	①「XしてYしない」 ②「XしてYするのか」 ③「XしてYする [補文標識] Zである」(Zは評価語)

テ形接続構文における逆接の３類型 (江口 2016: 74 表３の一部)

この表に関して注目すべきことは、《偽装》型や《敢行》型に比べて「述語の語彙的な制約が緩和」(p. 72) されている《意外性》型が、①「XしてYしない」②「XしてYするのか」③「XしてYする [補文標識] Zである」という３つの構文のいずれかに当てはまるという点である。このことは、次節で先行研究の問題点を指摘する際にも重要なポイントとなる。

2.1.4. 先行研究のまとめ

前節までに挙げた先行研究の共通認識を掬えば、(A) のようになるであろう。

(A) 文全体において、テより前の部分で表された内容から予測される事態とは異なる事態が、テより後の部分で表されている場合、そのテあるいはテ形は逆接の意味を表している。

2.2. 先行研究の問題点

先行研究に対して、次の問題点が指摘できる。すなわち、テ形接続構文を用いた文から読み取れる逆接の意味を、文全体から解釈されるものであるとしながら、結局はテ形あるいはテという部分が担う意味であるとしている点である。この点について、先行研究の記述を確認しておこう。日本語記述文法研究会 (2008) や仁田 (2014) では、(7) のように、テ形接続構文を用いた文から逆接の意味が解釈される理由を前後の述語間における意味的相反にあるとしながら、(8) (9) のように、それがテ形の意味を決め、あるいはテ形の意味に深く関わるとしている。

(7)「２つの述語が意味的に相反するものになっているため、結果的に逆接の意味が成立するものであ」る。 (日本語記述文法研究会 2008: 286)

(8)「テ形・連用形はそれ自体がもつ意味が希薄であり、その意味の解釈は、前後の事態や文脈に依存する。」 (日本語記述文法研究会 2008: 280)

(9)「様々な意味をテ形が形式の意味として分化させているのではなく、テ形で結びつけられる前後の事態の意味的なあり方が、テ形の意味の表れに深く関わっている」 (仁田 2014: 421)

ここで問題となるのは、「前後の事態や文脈に依存」し、「前後の事態の意味的なあり方」から「結果的に」成立する逆接の意味が、なぜテ形の意味に還元されるのかという点である。

確かに、関係的意味である「逆接」が、節と節をつなぐ部分であるテやテ形に担われるという分析は、一見頷けるものである。しかし、例えば、 (10) を見てみよう。 (10a) では、「が」より前で述べられている「喧嘩別れした太郎と花子」から予測されるであろう「その後険悪なムードになる」等に反して、「仲良さげに買い物をしていた」という事態が表されている。つまり、 (A) の「前半の内容から予測される事態とは異なる事態が後半で表され

る」という点では、 (1) と同じである。 (10b) でも同様に、「を」より前の「こんなにおいしい料理」から予測される「その料理を食べる」等に反して、「全部捨ててしまう」という事態が表されている。しかし、文全体の意味として逆接の意味が解釈できる (10) であっても、例えば「が」や「を」が逆接の意味を担っているとは言えないであろう。

(10) a. 喧嘩別れした太郎と花子が仲良さげに買い物をしていた。
b. こんなにおいしい料理を全部捨ててしまうなんてもったいない。 (どちらも作例)

(10) の例が示すことは、文全体から解釈できる意味であっても、必ずしも文の構成部分に還元できるとは限らないということである。この時、(1) のようなテ形接続構文においても、逆接の意味が必ずしもテ形という構成部分に還元できるとは限らないという可能性が生じる。

また、江口 (2016) が指摘するように、テ形接続構文における逆接のうち、テ形の述語に制限のない《意外性》型は、あくまで３つの構文の中で成り立つものであった。江口の指摘から言えることは、テ形接続構文から読み取れる逆接の意味は、実際は上記の３つの構文による支えがなければ成り立たないものであるということではないだろうか[5]。

3. 理論的背景

3.1. 記号的文法観

まずは、Langacker (1987) から、記号的文法観の考え方を (11) に示す。

(11) “I contend that grammar itself, i.e. patterns for grouping morphemes into progressively larger configurations, is inherently symbolic and hence meaningful. Thus, it makes no more sense to posit separate grammatical and semantic components than it does to divide a dictionary into two components, one listing lexical forms and the other listing lexical meanings.” (ibid.: 12)

(11) に関して重要な点は、形態素にせよ、より大きな構造にせよ、その全てが記号的 (symbolic) であると考える点である。言い換えれば、どのような大きさの言語構造でも、記号的であることが記述を可能にするという点である (cf. Langacker 2008: §13.3.2.)。

ただし、言語における意味と形式の対応関係について、重要なことを述べておく必要がある。(12) は、田村 (近刊) が「ユピック・エスキモー語では、その存在物の認識的有り様を示す定性が、名詞が位置づけられる節全体の構造から決まるという特性がある」ということを示すために挙げる例である。

(12) a. neqa quimar-tuq. (自動詞構文 (INTR = 自動詞接辞))

fish.ABS　swim-3rd.INTR
「魚が泳いでいる」 ‘The fish/A fish is swimming.’

b. Caan-am　ner-aa　neqa.　(他動詞構文 (TRAN = 他動詞接辞))
John-ERG　eat-TRAN.3s3s　fish.ABS
「ジョンはその魚を食べた」 ‘John ate the fish/*fish.’

c. Caan-aq　ner-ruq　neq-mek.　(自動詞構文 (ABL.MOD = 奪格接辞))
John-ABS　eat-3rd.INTR　fish-ABL.MOD
「ジョンは魚を食べた」 ‘John ate *the fish/fish.’ (ibid.)

田村によれば、自動詞構文が使われる (12a) では、“neqa” は定とも不定とも解釈できるが、他動詞構文が使われる (12b) では、定としてしか解釈できないという。この時、“neqa” を不定として解釈するためには、(12c) のように接辞を付して自動詞構文にする必要がある。

この議論が意味することは、存在物の有様を表す概念 (ここでは、定性) であるからといって、必ずしもそれが名詞句 (ここでは、“neqa”) によって表されるとは限らないということである。テ形接続構文と逆接の意味との関係を、この議論から類推的に言えば、逆接が関係的意味であるからといって、必ずしもその意味が前後をつなぐ部分であるテ形やテによって担われるとは限らないということになる[6]。そして、実際、(10) のように、逆接的な解釈が文の構成部分に還元できない例が存在し、江口 (2016) を基に指摘したように、テ形接続構文における慣用句的でない逆接は、他の構文に支えられて成立するであった。

3.2. 百科事典的意味論とアクセシビリティ

(13) では、認知文法における語彙の意味のあり方が述べられている。このように、認知文法や認知言語学では、言語使用における語彙や言語表現の意味は、言語表現をアクセス・ポイントとして、一般的な知識や文脈的な知識等を基にアクセスされるものであるとされる[7]。

(13) “[A] lexical meaning resides in a particular way of **accessing** an open-ended body of knowledge pertaining to a certain type of entity.”　(Langacker 2008: 39)

また、このとき、吉村 (2013) が (14) で述べるように、百科事典的知識へのアクセスには、アクセシビリティの差があることが予測される。

(14) 「語の意味とは、あるモノのタイプに関する解放された知識総体へとアクセスする特定の方法であり、特定のフレーム、進行しつつある文脈の先行発話、選択された理想化認知モデル内にある前提などを通してアクセスされる」 (吉村 2013: 301)

このような考え方を基に、(15) の例を見てみよう。

(15) メロン、柿、いちご、ぶどう

我々は、(15) に並べられた４つの語を左から順に理解するとき、それらの関係について意識的に考えることはしないはずである。これに対して、(16) を見てみよう。

(16) 梨、バナナ、オレンジ、白菜

(16) に並べられた語を左から順に理解するとき、(16) の並びに「白菜」があることに違和感を覚える人が多いのではないだろうか。

(16) で違和感が生じる理由は、知識へのアクセシビリティの観点から、次のように説明できよう。我々が (16) において、「梨」「バナナ」「オレンジ」という語の連続を理解するとき、それぞれの語や語の連続によって、「果物」という知識に対するアクセシビリティが高まると考えられる。しかし、次の「白菜」は「果物」という知識によってはアクセスすることが難しい。このアクセシビリティの差によって、(16) の連続と言語主体の知識との間に不調和 (以下、認知的不調和と呼ぶ) が発生するのである。

4. 考察

4.1. 認知的不調和による説明

第3節で (16) の例を用いて見たように、知識へのアクセシビリティの差は認知的不調和を引き起こすのであった。このことを踏まえた上で、(17) を見てみよう。

(17) 和宏は街で評判の中華料理店に入った。(和宏は) 麻婆豆腐を注文した。

(17) では、「和宏が街で評判の中華料理店に入った」ことと「(和宏が) 麻婆豆腐を注文した」ことという2つの事態が並べられている。多くの人にとって、この2つの事態の連続は違和感なく理解されよう。しかし、これに対して、(18) を見てみよう。

(18) 和宏は街で評判の中華料理店に入った。(和宏は) 何も食べなかった。

(18) では、「和宏が中華料理店に入った」ことと「(和宏が) 何も食べなかった」ことという２つの事態が並べられている。このとき、我々は、「和宏が中華料理店に入った」ことと「何も食べなかった」こととの連続に違和感を覚えるであろう。

(16) の例と同じように考えると、(18) の違和感は次のように説明される。我々が「街で評判の中華料理店に入った」という事態を理解する時、例えば「そこで美味しい中華料理を堪能する」などの知識に対するアクセシビリティが高まると考えられる。しかし、「何も食べない」という知識へのアクセシビリティは高まっていない。したがって、この２つの事態の連続と言語使用者の知識との間で認知的不調和が生じるのである。

上記のように考える時、特定の形式と逆接の意味との関係は問題とならない。あくまで、(18) の文全体で述べられる内容の連続と、話者の知識との間で認知的不調和が生じることが重要なのである。この点において、本稿は (10) のような文と (19) のような文とを同様に扱っているとも言える。

(19) 和宏は街で評判の中華料理店に入って、何も食べなかった。

4.2. 主張から予測されることの検証

認知的不調和が百科事典的意味へのアクセシビリティという程度性を前提とした概念である以上、テ形接続構文から解釈される逆接と非逆接[8]には連続性が存在すると予測できる。本節では、この予測が正しいことを、コーパス[9]の例を用いて示す。

具体的には、継起と逆接の連続体 (=(20))、および付帯と逆接の連続体 (=(21)) を以下に示す。どちらの例でも、 a から d に進むにつれて、解釈される逆接の程度が強くなると感じられるのではないだろうか。

(20) a. [F004 がドラマのシーンを説明している。恭子、美保はどちらもドラマの役名]
F004 : [恭子が美保の部屋に] 入り込んでー、でー、美保の洋服着てみてー、（うーん）化粧してみてー、でー、こう美保の寝てる、ね、いつも使ってるベッドにー、こう、横たわって、美保ーとかって言ってんの。

b. [F004 の交際相手は奨学金をもらい続けている]
F004 : ドクター入って、なんかさ、向こうがさ、ずっともらってるわけね、修士からずっと、で、ドクター入っても。

c. [F002 が登山に行ってきた時の話をしている]
F002 : 寒いんだろうってんで、コートを、あの、（うん）キルティングした、（うん）あの、軽いんだけど、ナイロンのこう、（うん）それをぎりぎりにベルトでしばって、担いで、＜笑い＞それでもベストの背中汗びっしょり抜けて。

d. [M033 は友人と鍋料理を作っている]

M033：ていうか、お前、恥ずかしいよ。しらたきを切らないで、なべに入れてしまう君は恥ずかしい。

(20a) は、複数の事態がこの時間順に (あるいは F004 の思いついた順に) 生じたと解釈されるのが普通である。すなわち、事態連続が認知的不調和を生じさせていない例であると言える。これに対して、 (20d) は (継起かつ) 逆接と読まれ得る。「しらたきを切らない」ことと「(それをそのまま) なべに入れる」ことという事態連続と話者の知識との間に、認知的不調和が生じていると言えるのである。

(20a) と (20d) とを２つの極として、(20b) や (20c) をその中間に位置づけることができる。たとえば (20b) では、「F004 の交際相手が博士課程に進んだ」ことと、「奨学金をずっともらい続けている」ことという事態連続が認知的不調和を生じさせるかどうかは、「博士課程に進む」という知識から「奨学金に頼らずに生活する」という知識へのアクセシビリティによって異なる。したがって、「F004 の交際相手が博士課程に進んだ」ことから「奨学金をもらい続けている」ことへのアクセシビリティは、(20a) よりは高くないが、 (20d) よりは高いという程度であると考えられる。(20c) も同様である。

続いて、付帯の意味が読み取れるテ形接続構文から読み取れる逆接の強さの連続体を (21) に示す。(21) においても、(20) と同様に、逆接と非逆接の連続性が認められよう。

(21) a. [現場の決定を F049 の上司が取り下げた]

F049：で、帰ってから、[現場で決定したことについて] こうしましたとか言うと、だめだよそれは、とか言われて、（うん）急いで現場に電話して、すいませんさっきの取り消してくださいとか言って。＜笑い＞

b. [共働きの夫の方が早く帰ったのに、夕飯の支度をせずに待っている]

F162：でもねー、なんかやらないで待ってられたらちょっと、（＜笑い＞）ちょっとー、ちょっとーおって感じだよね。

c. [大阪の街を歩いていると阪神百貨店の地下街に着いた]

F159：で、結構ほんとに普通のＯＬさんとかあ、学生みたいな若い女の子とかもー、立ってーラーメンとか、たこ焼きとかあ、（へえー）１人とかで食べててー。

d. [F004 の弟はパソコンのことを何も分からずにメールを送っている]

F004：でも、なんか送られてくるメール見て、絶対こいつはなんにも知らないでやってるって思ったのねー。

5. おわりに

本稿では、テ形接続構文から解釈され得る逆接の意味が、テ形やテという部分に還元的に担われるものではなく、言語に表される事態連続と言語主体の持つ百科事典的知識との認知的不調和によるものであることを主張した。また、その主張から予測されることとして、テ形接続構文から解釈される逆接と非逆接の連続性を、コーパスの例を用いて示した。

ただし、本稿はテ形における意味変化の可能性を否定するものではない。実際、江口 (2016) の《偽装》型や《敢行》型では、固定された表現として定着したものがあることは事実である。また、《意外性》型においても、今後、テ形それ自体が逆接の意味を表すようになる可能性がない訳ではない。その連続性については、Langacker (2000) などが提唱する使用依拠モデルによる記述が有効であると考えられる[10]。

また、日本語記述文法研究会 (2008) などが指摘するように、連用形でつながれた文では逆接の意味が表せないという点も無視できない。つまり、テ形が持つ何らかの特性が、テ形接続構文の意味に貢献し、それが結果的に逆接の意味を可能にしている可能性は高い。本稿ではこの事実に関する説明を準備できなかったため、今後の課題としたい。

参考文献

江口匠 (2015)「〈逆接〉を表す「て」をめぐって」学習院大学人文科学研究所編『人文』14: 59–77.

川端善明 (1958)「接続と修飾—「連用」についての序説—」『国語国文』27(5): 38–64.

言語学研究会・構文論グループ (1989a)「なかどめ—動詞の第二なかどめのばあい—」『ことばの科学２』: 11–47, むぎ書房.

言語学研究会・構文論グループ (1989b)「なかどめ—動詞の第一なかどめのばあい—」『ことばの科学３』: 163–179, むぎ書房.

田村幸誠 (近刊)「使用依拠モデルに基づく言語観」山梨正明, 吉村公宏, 堀江薫, 籾山洋介編『認知日本語学講座 第１巻 認知言語学の基礎』: Ch.6, くろしお出版.

仁田義雄 (1995)「シテ形接続をめぐって」仁田義雄編『複文の研究 (上) 』: 87–126, くろしお出版.

_____ (2014)「テ形」日本語文法学会編『日本語文法事典』: 420–421, 大修館書店.

日本語記述文法研究会編 (2008)『現代日本語文法6第11部 複文』, くろしお出版.

野村益寛 (2013)「百科事典的意味論」辻幸夫編『新編 認知言語学キーワード事典』: 300, 研究社.

藤村逸子・大曽美恵子・大島ディヴィッド義和 (2011)「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」藤村逸子, 滝沢直宏編『言語研究の技法 : データの収集と分析』: 43–72, ひつじ書房.

森田良行 (1989)「〜ても」『基礎日本語辞典』:766–767, 角川書店.

吉田妙子 (2012)『日本語動詞テ形のアスペクト』, 晃洋書房.

吉村公宏 (2013)「百科事典的知識」辻幸夫編『新編 認知言語学キーワード事典』: 301–302, 研究社.

渡辺実 (1971)『国語構文論』, 塙書房.

Langacker, Ronald W. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar,* vol.1: *Theoretical Prerequisites.* Stanford University Press.

_____. (2000) "A Dynamic Usage-Based Model" *Usage-Based Models of Language*, ed. by Michael Barlow and Suzanne Kemmer, 1–63, CSLI Publications, Stanford.

_____. (2008). *Cognitive Grammar: A Basic Introduction.* Oxford University Press.

---

* 本稿は、日本言語学会第 155 回大会における本稿筆者の口頭発表、およびそれを基にした修士論文の一部に、大幅な加筆と修正を施したものである。

1 本稿では、「食べている」「食べてくる」などの、いわゆる補助動詞や複合述語と呼ばれる形式を対象としない。また、テ形あるいはテ由来の形式で逆接の意味が読み取れるものに、他にテモがある (cf. 仁田 2014: 420、森田 1989: 766–767) が、これも扱わない。

2 以下、例文における強調はすべて原文によるものである。

3 このような手法のほかに、テ形接続構文 (や連用形) に表され得る関係的意味の多義展開の可能性を論じる先行研究も存在する。川端 (1958) や渡辺 (1971) などがこれに該当するが、紙幅の都合上、これらの先行研究に関する議論は行わない。

4 言語学研究会・構文論グループ (1989a, b)、仁田 (1995, 2014)、日本語記述文法研究会 (2008)、吉田 (2012) をまとめたものである。

5 ただし、先にも書いた通り、江口自身は「て」が逆接を表すという立場である。

6 「ユピック・エスキモー語の例は、問題の意味が名詞句以外の部分に形として現れているのに対して、テ形逆接の意味はそうではないので、あまりよい類推になっていない」という指摘を匿名の査読者 (甲) から頂いた。確かに (12) では、構文という形式に定性が表されているとも言えるので、綺麗な類推関係とは言えない。しかし、ここでの主旨が、「存在物に関する概念 (定性) が、存在物そのものを表すと考えられる名詞句には表されていない」という点であって、「それ以外のどこに表されているか」ではないということを鑑み、(12) の例を使うこととした。

7 Langacker (2008: §2.1.3) と野村 (2013: 300) を参考にした。

8 ここで「順接」ではなく「非逆接」という用語を用いたのは、日本語記述文法研究会 (2008) における「順接条件」という用語との混同を避けるためである。

9 『名大会話コーパス (藤村・大曽・大島 2011)』を、全文検索システム「ひまわり (ver. 1.5.5)」を用いて検索した。

10 匿名の査読者 (甲) から頂いたコメントである。